

第8回 SARBICA(ICA東南アジア地域部会) 総会に参加して

水口 政次

7月20～21日に開催されたSARBICA (Southeast Asia Regional Branch of ICA, 国際文書館評議会東南アジア地域部会) の第8回総会に参加する機会があった。SARBICAは設立されてから今年で22年目を迎えた。総会は2年に1回各国持ち回りで開催され、今回はマレーシアの番であり、首都であるクアラルンプールが会場となった。総会に先立つ16日から19日までの4日間、「文書館における自動データ処理に関するセミナー」があり、これにも参加したかったが、日程の都合でかなわず、総会のみ参加となった。

総会参加国は構成会員であるインドネシア、マレーシア、シンガポール、タイ、ブルネイ・ダルサラム、フィリピンとオブザーバーとしてミャンマー、ベトナム、中国、イラン、カナダ、香港、日本(4人)。そしてICAからマイケル・ローパー氏(英国国立公文書館長でICA事務局長)が参加した。日本の4人は、安藤正人(国立史料館)、廣瀬睦(同)、松村光希子(国会図書館)、それにわたし。全史料協を代表するという形で参加させていた

だいた。

総会は、全史料協の総会とそれほど相違があるわけではない。まず、開会のあいさつがあり、前回の総会議事録の承認から議事が始まり会計(予算・決算)の承認、各事業(10項目)について報告・質疑、各国文書館等の事業説明、今後の活動方針の説明・議論、次期の三役と開催国の決定、そして、全体討論の後、勧告と決議を承認して終了した。

総会の雰囲気を見ると、議論に参加している人々は、議長、副議長、事務局長、会計が前の雑壇に座り、後の参加者は円卓に座り時計回りでいうと、まず、マレーシアの二人(事務局員)、タイの二人、シンガポールの二人、フィリピンの二人、マレーシアの二人、インドネシアの二人、ブルネイ・ダルサラムの二人の18人である。驚いたことには、このうち男性はわずか5人であり、後はすべて女性であり、それも館長クラスかあるいは文書館でかなり責任のある地位についているアーキビストである。

わたしの英語力の限界で討論の内容を伝え

ることは困難であるが、飛び抜けて活発な発言をしていたのが、シンガポールの館長だった。全体の雰囲気は討論のやりとりの割にはとてもなごやかで、議論しながらときおりお互いに大笑いするような場面が何回かあった。また、この総会でひととき存在感があったのは、ICA会長代理のローパー氏であった。SARBICAがICAやUNESCOを大変頻りにしている様子がはっきりと見えたとし、また、ICAの方でも協力できるところは協力する姿勢が感じられた。ローパー氏は丁寧な説明やアドバイスを行い、とても頼りになる人物の感が強い。総会最後に勧告・決議文に対して質疑が行われたが、英語表現そのものの問題もあり、ローパー氏が英語教師のように表現についてアドバイスを行っていたのが、とても印象深かった。

さらに、今回のSARBICA総会参加について感じたことは、参加国が力を合わせて少しでもよりよい文書館運営を行おうとしていることであり、そのための各国の協力姿勢である。しかし、どこでも共通することであるが、そういった事業を支える人の問題と同時に、やはり資金面の問題も大きいと言わざるをえない。総会の中で議長がある事業説明に対して「お金がない」と発言したことが私の耳に残っている。また、今回の総会でベトナムの入会が承認された。それもいとも簡単に全員一致で大きな拍手で迎えられたのである。

SARBICAも東南アジアのもうひとつの大きな文化団体として着実に発展しつづけ



ている。われわれとしても、同じアジアに位置すると言われるからには、今後とも情報交換等交流を深める必要があり、できることからやっていく姿勢が要求されていると思う。

最後に、今回のSARBICA総会の参加にあたってマレーシア国立公文書館の担当者の方々にいろいろとお世話になった。初めはオブザーバーだから総会だけ出席して後は自由行動でいこうと思っていたが、主催者からは総会参加者の一員としてもてなされ、昼食会、夕食会、マラッカへの日帰り旅行等参加者全員と行動を共にした。本当にかゆいところに手が届くもてなしであった。各担当者からももう少し滞在を延ばしたらいいのにと何回も言われた。嬉しいことに日本の参加者はそれぞれにマレーシアの友人を得た。今後は、お互いの情報交換等を通じて協力関係を着実に構築していきたい。

なお、今回のSARBICA総会参加に際して、旅行の準備から滞在中の面倒まですべてにわたって安藤正人氏のお世話になった。ここで改めてお礼を申し上げます。

みずぐち まさじ・東京都公文書館



マレーシア国立公文書館のマーク